

### [1] 一五の僕

この曲は15歳の少年が「手紙」の中で自分自身の悩みを素直にうちあけ、それに対して大人になった僕が応答するというかたちをとっている。年輩者が多いわれわれエルデの団員がこの曲に対峙するとき、まず念頭に浮かぶのは15歳の心境をどこまで理解できるか、という懸念ではなかろうか。というのはエルデの団員にとって思春期は遥かに遠い過去のことで、ほとんど思い出せないのが実情であるように思えるからである。そこでまず思春期の特徴を理解する必要があるが、そのために発達心理学の知見を少し援用することにしよう。

§ **思春期の特徴と悩み**・・・15歳は発達段階としては「思春期」にあたり、まさに人生の春である。春は大地から植物が芽吹き、みずみずしく新鮮に輝く時である。人間もこの頃には性ホルモンの分泌が始まっており、しだいに男性は男性らしく女性は女性らしい体形に変化していくが、それと共にこれが心理的にも大きな変化をもたらす。この時期は「反抗期」とも言われ、自己主張が強くなり親や教師などが体現している既成の権威に反抗する。反抗というかたちをとっているが、これは思春期の子どもが自分自身の精神世界を模索し、自立し始めていることの現われである。ここで顕著になるのが思春期の悩みである。

思春期の少年は人生経験は浅いゆえに、どのように生きていくかまだ前途の見通しは立たず厳しい状況におかれている。一五の僕は「負けそうで、泣きそうで、消えてしまおう」であり、自分の人生に真摯に向き合おうとすると「胸が何度もばらばらに割れ」、このような「苦しい中で今を生きている」のである。このように表現されている思春期の鋭敏で多感な少年の気持ちに思いを巡らし、共感をもって歌うことがこの歌に対する基本姿勢であると思われる。

### [2] 大人の僕から

このような悩みを綴った少年の手紙に、大人になった僕が答えているが、ここには人が生きるうえで重要なことが語られている。以下その中のいくつかの言葉を取り上げて愚見を述べることにしたい。

§ **「自分とは何でどこへ向かうべきか」**・・・「自分とは何か」、今はやりの言葉を使えば「アイデンティティ」の探求ということである。少年が精神的な自立をめざして「自分さがし」始めるとき、まず最初に出てくるのがこの問いかけである。このカタカナ語は日常用語となって軽く使われているようであるが、実はこの問いは人間にとっては根本的な問いかけであり、人間の本質的命題である。この答えが分かれば「自分はどこへ向かうべきか」ということも自ずと見えてくるのだが、人生の最難問の一つであるゆえに、簡単に分からないというのが実状。しかし、次のように続く。

§ **「問い続ければ見えてくる」**・・・「自分とは何か」、この問いに対して安直に答えは出せるものではない。難題で分からないから放棄するのではなく、迷いながらも「問い続ける」ことが大事なのであり、そのことに意味があるという。容易に答えは出な

いけれど、問い続ければ「見えてくる」という。そして「青春の海は厳しい」が、「明日の岸辺へと夢の舟よ進め」と少年を励ます。おそらくそこには眼には見えないが、朧げながらも一条の光がさして込んでくるのが想像される。希望を与える表現だと思う。

§ 「人生の全てに意味があるから恐れずにあなたの夢を育てて」・・・「人生の全てに意味がある」と言われても、これをすんなりと受け取るとは極めて難しいこと。人生は楽しい順境の時もあるが、苦しい逆境の時もあるから。しかし、そのいずれにも意味があるという。問題は逆境の時に感じる人生の不条理だ。どうして自分がこんな苦しみ遭遇せねばならないのか。こんなことに意味があるのか。「意味なし」と感じる方が人情であり自然な思いであろう。確かに不条理は厳然と存在する。例えば第2次大戦中にユダヤ人というだけでナチスの強制収容所に入れられ、彼らは言語に絶する残酷で悲惨な体験をさせられた。にもかかわらずフランクルは「それでも人生にイエスという」(Whatever happens, I can say Yes to my life.)。こう言いきったフランクルの不条理をも肯定する精神の強靭さはどこに源泉があるのだろうか。それは**人生の意味**を深く感じ取っていることにあると思われる。大人の僕が言った「人生の全てに意味がある」という言葉も、このように受けとめたい。そうすると次に続く「意味があるから恐れずにあなたの夢を育てて Keep on believing」という希望を託した励ましの歌詞も心の流れとして自然に入ってこよう。

§ 「今を生きている」・・・この言葉は歌詞の中に何度も繰り返し使用されていることからして、この歌のキーワードの一つと受け取ってよかろう。「生きている」ということは「今」しかなく、今の連続が一日となり、一年となり、そして自分の一生となる。人生とは「今」という時の連続ということだ。古今東西の賢人たちは now and here ということの重要性を折に触れて説いているが、われわれは常識として知っていても、この厳然たる事実の重さを見過ごして日々を生きている。「手紙」のなかでも繰り返し使われた「今を生きている」というフレーズ、この歌を口ずさむ時だけでなく、いつも心に留めていたのだが・・・。

§ 「大人の僕も傷ついて眠れない夜はあるけど、苦しくて甘い今を生きている。」・・・この曲が多く人々の心の琴線に触れ歌われているのは、この文言にあると思う。苦しいのは若い君だけじゃない、**大人の僕も**君と同じように傷ついて苦しみをかかえながら今を生きているんだ、というメッセージである。ここには子どもに対して大人が上から見降ろして説教調になっているのではなく、少年の目線に立って苦しみや悩みに共感している。このような姿勢が少年の心を捉え、「笑顔を見せて今を生きていこう」とする意欲を少年の心に生じさせているのである。そして大人は少年に対して「**幸せなことを願います**」という祈りに近い言葉で締めくくっている。このような温かな眼差しと共感的な態度がこの歌の魅力となっていると思われる。この曲を歌うとき、この歌がもっているこうした魅力が表現できるよう心して歌いたいと思う。